

【原著論文】

地域子育て支援拠点における親とスタッフの 子ども理解と親理解の展開過程

榊ひとみ

The Development of Understanding children and Understanding parents of Parents and Staffs in Drop in Center

Hitomi SAKAKI

1. 問題意識

我が国における3歳未満児の平日の日中の居場所は、この10年間で大きく変動している。厚生労働省（平成30年9月7日）「保育所等関連状況取りまとめ（平成30年4月1日）」によれば平成30年4月1日時点での1・2歳児の保育所等利用率は47.0%となっている。『保育白書2018年度版』（2018）によれば、2006年時点で1・2歳児の家庭等で過ごす割合は71.1%、28.9%が保育所等で過ごす状況であったが、2016年は、家庭等で過ごす1・2歳児は53.4%、保育所等で過ごす1・2歳児は46.4%となっている。3歳未満児の平日の日中に過ごす場所は、家庭等から保育所等に移動していることがわかる。

子ども・子育て支援新制度が2015年度に施行されてから、3年が経過しているが、子育ての市場化・外注化傾向が進展するなかで、子育てをする親たちは、「保育サービス・子育て支援サービスの受け手」とならざるを得ない状況に追い込まれている。こうした流れのなかで、親たちは、地域の人々と協同で子どもを育てる営みを通じて学んでいく機会や、協同で子どもを育てる中で親として力量を高めていくことから疎外されているといえる。

こうした社会状況の変化のなか、親や子育て支援に関わるスタッフにはどのような学習が必要なのだろうか。本論の問題意識はこの点におかれている。

2. 課題と方法

上記の問題意識に基づき、本論では、子育て中の親とスタッフが協同で、地域の居場所づくり実践を行っているNPO法人「実践D」の事例をとる。実践Dは、2007年6月に活動が

開始され、キリスト教系私立E幼稚園の園庭とホール、隣接する建物の2階を拠点に、地域の親子や住民に一般開放し、赤ちゃんからお年寄りまでの多世代の地域住民の居場所づくり活動を行い、2011年10月からは、A県B市の地域子育て支援拠点となっている。発表者は、この「実践D」に、2010年の9月からアクションリサーチの手法でフィールドに入り、2010年度は、「実践D」のボランティアとして、また2011年度から2015年度まで、「実践D」のスタッフとして、実践に関わりながら、フィールドノーツの記録およびデータ収集、「実践D」に関わるメンバー、参加者への聞き取り調査を行ってきた。

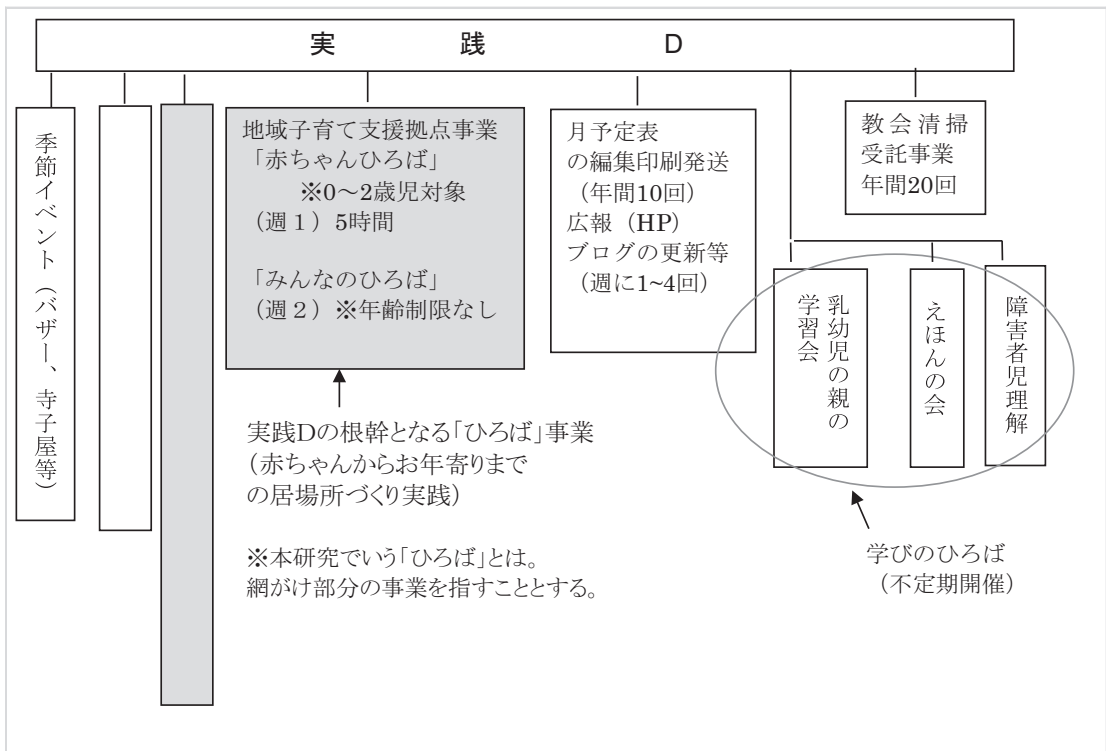
本論の課題は、「実践D」の事例に即して、地域子育て支援拠点における親とスタッフの子ども理解と親理解の展開過程を明らかにすることである。この課題を明らかにするため、スタッフの湊さん（仮名）堺さん（仮名）、2011年から現在まで実践Dに参加者（親）として関わっている岡さん（仮名）、親として実践Dに参加し始め、現在は実践Dのひろばスタッフとして関わっている岸さん（仮名）に半構造化インタビューを2018年4月（湊さん、堺さん）と9月（岡さん、岸さん）に実施した。本論では「実践D」での協同的な子育て実践に関わることによって、親とスタッフには、「子ども理解」（子どもをどう理解するのか、子どもをどのような存在として理解するのか）、「親理解」（親をどう理解するのか、親をどのような存在として理解するのか）に変化が見られるのか、もし変化がみられるとしたらそれはどのような理由によるものなのかについて検討したい。倫理的配慮から、全ての名前を仮名にし、調査協力者全員に本論で調査データを公表することの承諾を得た。

3. 実践Dの概要

実践Dは、A県B市の学校法人E幼稚園が2005年に組織したE幼稚園将来構想委員会を母体とし、日本基督教団Y教会、E幼稚園保護者会のサポートを受けて、当時E幼稚園のPTA役員だった堤さん（仮名）と当時E幼稚園の主任教諭だった湊さん（仮名）が中心となり、2007年6月に立ち上がった団体で、2018年にNPO法人となった。E幼稚園は、「人間の尊さを共に生きる」を理念とする私立キリスト教会系幼稚園で、B市のキリスト教会系幼稚園のなかでも歴史は長く、1953年に創設された。組織の中心的なメンバーは、E幼稚園に子どもを通わせている親や、E幼稚園と関わりのある親、子育てから手が離れた元保育士や地域住民などである。活動は、園児の降園後のE幼稚園の園庭とホール、E幼稚園に隣接

する建物の2階部分を拠点とし、行われている。実践Dは、B市の中心部から5キロほどの場所に位置し、地下鉄やバスの交通の便もよい。実践Dの位置する地域には、徒歩圏内に、中学校、高校がそれぞれ1校ずつある。また、徒歩圏内には公務員住宅があり、転勤によって転入／転出する子育て家庭も多い。事業は、参加者や賛助会員による賛助金、教会清掃による教会からの委託金、バザーやイベントによる売上金の一部の協賛金、B市からの地域子育て支援拠点事業費を含めた収入によって、運営されている。

実践Dの概要については【図1】に、実践Dが立ち上がった経緯及びE幼稚園将来構想委員の議論については【表1】に、実践Dの理念については【図2】に、実践Dの時期区分については、【表2】に整理した。



▲【図1】 実践Dの事業の概要

実践Dのミッション(使命)：
 実践Dは、子どもが人との関わりの中で
 希望を持って育つ地域をつくります。

バリュー(価値観)：
 違いを認め合い、ありのままを受け止めあおう。
 弱さがあるからつながれる。つながることを喜ぼう。

ビジョン(こころざし)：
 私たちの今の命が未来の命につながっていくことを夢見て、
 実践Dはこのような歩んでいきたいとおもいます。
 10年後、6年後、3年後…

10年後
 実践Dは、訪ねてきた方の多様な過ごし方を可能にする
 機能をあわせもったコミュニティになっています。

6年後
 実践Dはここに関わる人の就労を支える場になっています。

3年後
 実践Dは地域に住む人がよく訪ねてくる
 多世代の人々が集える場所になっています。

▲【図2】実践Dの理念(2012年春作成)

▼【表2】実践Dの時期区分(2007~2017年)

年度	概要	時期区分
2007年度	・リーダー層の「居場所づくり」の模索	模索期
2008年度	・前年度の課題を踏まえた組織・体制づくり	発展期
2009年度	・参加者からボランティアスタッフへの人材育成に焦点化	充実期
2010年度	・事務局主導によるチームの体制づくりとひろば設定の減少(実質的な規模縮小)	苦惱期
2011年度	・地域子育て支援拠点事業の受託に伴う組織・事業の見直し(それに伴う会議回数の増加)	変革期
2012年度	・スタッフの有償化とシフト制導入 ・ひろばスタッフミーティングとスタッフ研修の定例化	探求期
2013年度	・拠点事業が軌道にのる ・ひろばスタッフミーティングの定例化	安定期
2014年度	・若者の居場所づくり活動(「アフター」)の開始	挑戦期
2015年度	・若者スタッフ(大学生・20代)の増加	試行期
2016年度	・新旧スタッフの交代 ・「これから会」の開始	転換期
2017年度	・10周年記念事業 ・記念冊子の作成 ・「よるひろば」の実施 ・NPO法人化作業	新生期

▼【表1】将来構想委員会での議論の概要

2005年春	E幼稚園では、親も子ども地域社会の多様な人々との関わりの中で生活することが難しくなっていること、午後保育は行えない幼稚園機能の限界がクローズアップされ、子ども達の健やかな成長に対する危機意識が教諭間で芽生え始めた。今後も地域の幼児教育機関として存続していくためにも、どのようなことが幼稚園に求められているのかを検証するために在園児の親に降園後の子どもの生活に関するアンケートをとり、親の意見を把握した。アンケート結果からは「預かり保育ではなく子ども達が安心して遊べる居場所がほしい」「遊ぶ人がいない」「横だけの関係」「母子カプセル」等、子育て家庭が孤立している問題が浮かび上がった。
2005年夏~2006年秋	上記のアンケートを踏まえて、E幼稚園内に、幼稚園理事・教会・PTA役員・幼稚園教諭で構成される、「将来構想委員会」が設立された。将来構想委員会は2005年夏に立ち上がり、2006年秋までに7回の委員会が持たれた。委員会では、幼稚園と教会が母体となり、幼稚園教諭が主体となるのではなく、親たちが主体となって運営する「ひろば」が模索された。さらに、幼稚園の理念に基づき、「E幼稚園らしさとは何か」が整理された。E幼稚園らしさは、子どもひとりひとりから尊敬を持つ存在として尊重され、子どもたちが安らぎを感じながら育っていけること、そのための自由な集いの場、遊ぶことができる環境が提供されること等が確認された。そうした「場づくり」のためには、園に関わる親たちの潜在的な力を借りていくこと等が確認された。具体的にひろばづくりを誰が担っていくのかについては、B市内で先進的な取り組みをしている「協同実践Z」と「子どもの家W」の取り組みから学んだ。第7回の委員会では、「赤ちゃんからお年寄りの居場所」として、心のバリアフリーを目指す取り組みをしている「協同実践Z」のスタッフだった堤さん(当時E幼稚園のPTA役員)から「協同実践Z」の取り組み内容が委員会では報告された。
2006年秋	上記の「協同実践Z」の活動概要の報告がきっかけとなり、堤さんが将来構想委員となった。実践Dの先行モデルとして、「協同実践Z」の活動ビデオで、「ひろば」の具体的なイメージが教会関係者に紹介され、活動の意義や理念が共有された。「ひろば」が、そこに集う人々にとって、安心できる場、つながりあえる場、支えあえる場として、機能するためには、地域の様々な人々の手助けが必要なこと、障害を持つ人・持たない人、赤ちゃんからお年寄りの多様な人々の参加によって、「ささえあい」が可能となることが共通に理解され、具体的に「ひろば」には誰が参加するのかのイメージが整理された。
2006年秋~2007年春	具体的に「ひろば」のイメージを共有するために、a)イベントモデル(例：園庭にコンロを出し、親の手を借りながら、焼いた食材と一緒に食べる試み)、b)自主活動グループモデル(親たちが自主的にテーマを出し、そのテーマに沿ってグループで活動するとりくみ、障害者児の理解を深める活動など)、c)運営資金獲得モデル(パザー等で手作り品、不要品を売る取組)を実際に行い、それらのモデルを活用して、幼稚園保護者に「ひろば」構想を説明し、保護者のなかでも、特に興味関心のある人に向けたミーティングを開催した。更に教会員に「ひろば構想」を説明し、賛同を得た。
2007年春	教会役員・幼稚園役員から構成されるE幼稚園理事会で「実践D」が立ち上がることが正式に決定した。承認後、将来構想委員会は運営委員会に移行した。

4. 調査協力者のプロフィール

調査協力者である岡さん、岸さん、堺さん、湊さんのプロフィールを【表3】にまとめた。

【表3】聞き取り調査協力者一覧（名前は全て仮名）

名前 (年代)性別	子ども	実践Dへの 初参加時期	実践Dへの関与	実践Dに至る前の経歴	親・スタッフ の区分
岡さん (30代)女性	蒼ちゃん(小3) 礼ちゃん(年長) 環ちゃん(3歳)	2011年度	2011年に当時もうすぐ2歳の蒼ちゃんを連れてひろばに参加。実践Dで開催の「未就園児の親の学習会」にも参加。その後も、蒼ちゃん、礼ちゃん、環ちゃんを連れて、実践Dに参加している。	医療職／訪問看護ステーション (非常勤)	親
岸さん (40代)女性	響ちゃん(小3)	2011年度	2011年に当時2歳の響ちゃんを連れてひろばに参加。実践Dで開催の「未就園児の親の学習会」では、託児を担う。2018年からはひろばスタッフとしても実践Dに関わる。	美容師	親・スタッフ
堺さん (50代)女性	子ども2人 (20代)	2009年度	2009年度に実践Dに絵本の読み聞かせボランティアとして関わった後、2009年度より、ひろばスタッフ。その後、ひろばリーダー、事務局リーダーを担う。2011年度からは「未就園児の親のための学習会」も行う。	保育士／手話通訳／ 小学校の読み聞かせボランティア スタッフ	スタッフ
湊さん (50代)女性	-	2007年度	実践Dが立ち上がった2007年には、E幼稚園の主任教諭として実践Dに関わり、その後、E幼稚園を退職したのちは、実践Dのひろばスタッフ、ひろばリーダーとして関わる。「未就園児の親の学習会」では主に託児ボランティアの組織化に携わる。	一般企業／小学校教諭／ E幼稚園教諭	スタッフ

5. 聞き取り調査の結果

以下、聞き取り調査協力者の語りを示すが、()で示された部分は、筆者による補足を表す。

(1) 岡さんの語り

なんか、一人目のときは、やっぱり、なんかやっぱり「いい子にしなきゃ」っていうか、そういうのがすごく強いかから、「あれだめ、これだめ」って言って、できないと「き〜」っていう感じになっていたんだけど。(略) やっぱり、保育園の先生にも、言われるところもあったし。「特別食も大変だから、早く普通食になるように、『練習してください』とか、そういうのも結構あるし、一番上の子が、「さっきはぐずってなかったのに、お母さん来たら、突然、ぐずった」みたいなことを(園から)言われて、しょげたり。(略) 昔ほどは「き〜」とは言わなくなった。もちろん、外とか、人の目があると、抑え目だけど、家にかえると「き〜」。なんか「子どもが」っていうより、やっぱり、周りを気にしていたから、「子どもが」っていう考えがあんまりなくて、周りから(親として)見られるから、「〇〇せねばならない」というような感じ。(略) 親は「万能」なイメージ。「何でもできる」イメージがある。「何でもできて当たり前」みたいなものがある。やっぱり、自分も、なんか「親」をそういうふうに思ってきたから。「無理して」やってみたりとか。(いざ) 自分が(親に)なると、やっぱり、あれもこれ

も出来ないし。周りの人も全部を出来ているわけではないんだよね。「仕方ないな。」って思えるようにはなった。「今、お母さん、いらいらしているから、ちょっと、トイレにこもります」みたいな感じで。(笑) いらいらしたとき、感情をぶつけちゃうっていうか、そういう感じのことが、他の親も一緒なんだなっていうことが。(わかった)。「それで大丈夫なんだ〜」っていうか。「大丈夫」っていうとあれなんだけど、なんか、こう「あれもこれもできなきゃ、子どもはね、どこかで苦労する」とか、なんかトラブルっていうか、(あとでどこかで)あるんじゃないかって、先読みしちゃうっていうか。「幼稚園に入ったときに」とか。(発達段階の)「その次の段階にいったときに、なんかあるんじゃないかみたいな」。(でも)「子どもたちが自分でなんとかしていかないとダメなんだな」って(思うようになった)。「私がいくら準備したって、同じだ」っていうような。(略) 蒼は、几帳面っていうか、こだわりがすごいから、「今、これ、こだわらなくてもいいのにな」っていうところを「これじゃなきゃ！」っていう感じなんだけど、礼はそういう感じでもないんだよね。予想外のことをやる。

(2) 岸さんの語り

うちは特に、子どもが一人だから、「この子が標準」みたいに思っているけれども、「よくも悪

くもそうではない」っていうのはある。(略) 自分の子どもだけ、こう(視界が狭い状態で)みてたら、それは(子どもって面白いとか、かわいいとかは)なかったのかな〜。と。(略) たぶん、一人でこうやってわが子だけ見ていたら(略)「いらいら」的なものは多かったと思う。(略) ちょっと苦手な存在。子どもって。言葉通じないし。なんか、よくわかんないこと言うし、うるさいし、なんだったら、汚いし。(笑う) だけども、もちろん、自分の子どもはかわいいよね。かわいくて、その、「自分の子ども」の「過ぎ去ったかわいい時代」の子どもたちとか(関わりが持てる。)(略) 逆に、上の世代だったら、自分の子どもが(これから)行くであろう未来、みたいな、そう、そういう目で…。子どもを見るようになったかな。今3年生だから、それよりも大きい子とかは、「あ、こういう感じになっていくのかな〜？」っていう感じで見ると。下の子は、「こうだったな〜」とか。「あ、うちとは違うな〜」とか。そういうふうには見るようにはなかったかな〜。(略) ここに来るようになってからは、そんなに「興味ない」っていうほどでもなくて、「ああ、面白いな〜」と思うようになったから。(略) でもやっぱり、「自分の子どもを見て」からかな〜。見ると、やっぱり、自分の子どもの周りに、似た年ごろの子どもが集まると、「ああ、この子はこうだけど、うちの子はこうだわ」とか、いろいろ違いもあるし。うん。(略) よく聞く言葉だけど、「(子どもを)産んだからって、立派な親になれるわけではない」っていう。(略) 自分が子どもを持つ前は、むしろ、苦手な存在だから、騒ぐ子どもとかを見たら、「親！」と思っていたけど、(笑う)、うちがその立場になると、「あのとき、あんなこと、思ったな〜」みたいな。「嫌な顔してたかもしれないな〜」とかね。「親が子どもを静かにさせなければいけない」というよりは、「うるさい子ども」を、なんか、「〜だよな？」みたいなふうになったほうがいいと思う。(略) みんな、この、「うるさい子ども時代」を経て、なんか「肩身の狭い親時代」を経て、経て、経て、経て、経て、ってくるから、なんか「赦し合おうじゃないの？」っていう。そして「鬱陶しいお婆さん」になって(笑う)、そして、ねえ、こう、「ちょっと動作の遅い老人」になっていく。(略) そうなっていくから、ねえ、こう「赦し合って」。(略) でも、そんなふうに、よく思え

る時ばかりでもなくて、「う〜ん。この爺さん！」「どこの爺さん！これ！」と思う時もあれば、(笑う) さすがに「親〜！」と思うときも。「親、もうちょっと、子ども、見ようぜ！」みたいな。うちのとき、まだ、そんなにスマホがここまでの普及じゃなかったから、明らかにね〜。明らかかな人をみると、「ちょっと？」とは思うよね。「まあ、時代かね〜」とは思うけど。(略) いろんなお母さんたちの話をきくと、うちは、わりと、ちょろすけで、わ〜っていうタイプだけど、こっちから見て、「あのお母さんは、子育ての悩み、なさそうだな〜。お子さんも大人しくて、ゆうこときくし。」って思っているお母さんも、結構、そのことについて、悩んでる人がいたりするから、「あ、みんな、大変なのは一緒じゃないか！」みたくは思う。こっちからみたら、女のコで、大人しく座って遊んで、大声とかも出さない子でも、それはそれで悩みはあるんだな〜って。

(3) 湊さんの語り

(略) 私はやっぱり、「教師は教えてあげなくていけない」っていうものはどこかにあったので、だからね、1年生を持ったときに、非常にそこで失敗をした。子どもたちにかわいそうなことをしちゃった。子どもたちに。(略) でも、(E幼稚園では)、私、ちゃんと、ご指導いただき…。子どもたちに。「教えてあげるから、よく聞いて！」って。子ども達から。「始まるときは、こうやって、始まるんだよ！」「最初にお祈りでしょ」とか言われて、「あ、そうなのね。わかった」って。(略) 「どんなに小さくても、個人個人がちゃんと、自分を持って生きていけるんだな〜」っていうのが、(略) 幼稚園の段階から、ちゃんと、自分を持って、生活ができるんだな〜。っていうことは、E幼稚園の人たちから、(E幼稚園の子どもたちから) 教えてもらった。それ(人間としての土台)を、やっぱり培えるのが、幼児期なんだなっていうのが、わかった。その、小学校のときには、小学校教員のときには、それがちゃんとわかってなかった。(大切なのは)「幼児期なんだな！」っていうのは、すっごいよく分かった。でも、それは、E幼稚園に来なかったら分からなかった。(分からないままだった) 3歳児から5歳児を中核にみていたので(E幼稚園では)、それが今度は、(実践Dでは)「乳児に広がった」よね。で、E幼稚

園にいるときには、やっぱり、0・1・2（歳児）がわからなかったんだよね。見えなかったんだよね。小学校のときに、その、幼児がわからなかったのと一緒で、幼児のときに（E幼稚園のときに）、やっぱり0・1・2（歳児）がみえてなかった。で、結果的に、幼児期にさしかかった子たちという生活をするなかで、「何でなのかな〜？」とか、入園するときには、「どんな生活してきて、今まで、どんな生育があって、ここに来ているのかな〜？」とか。そういうことってあくまでも「予測にしかすぎなかった」んだけど、でも、それがやっぱり、乳幼児さんと、堺さんみたいに頻繁じゃないけど、託児をさせてもらった。あれは大きかったね〜。託児。みっちりだったじゃない？（2009年から実施している「乳幼児の親のための学習会」時の託児。）1対1で。あれでね、特に。あの、学習会するときには。私は「（託児）させてもらった」。本当に感謝だった。本当にそう。で、「あ、ここを大切にあげると、やっぱり、3歳児からはまた、『うれしい毎日』になるんだな〜。子どもって」って。（略）「自分をちゃんと持たせてもらう」ていうか。持っているんだけどね。持っているんだけど、でも、（自分を）表現したり、自分で決めたり、自分で考えたり、ていうことを、出来る限り尊重してもらいながら、0歳だろうが、1歳だろうが、2歳だろうが、10ヶ月だろうが、やりとりして「あ、この人、こういうこと大事にされて育てるんだな〜」ていうことがわかるときがあるの。だから、ちゃんとかう、その子の感じてたり、考えてたり、やりたいと思ってること、こう、全部ではないにしても、ある程度、ね、大事にされながら、尊重されながら、過ごしてきた子って、あ、こういうふうに表示できるんだな〜。とか、こういうやりとりができるんだな〜ていうのは、すごく、いろんな場面で教えてもらったかな〜。（略）その、「自分を大事にさせてもらう」ていうことは、一家庭ではできないんだよ。（略）一家庭では、無理なんだよ。だから。だから、こういうところがあって、出来るかぎり、その、乳児の時代にね、もう、幼児じゃなくて、乳児の時代に、どれだけ、「個」をしっかりとして、支えてもらうか。（略）保育園は、乳児から預かっているじゃない？でも、縦でいろんな年齢差がいるからさ。0から6までいるから、そういう意味では、幅が、幼稚園よりもずっとあって。可能性

としてはさ、いろんな多種の刺激のなかでさ、人間のね、過ごしていけると思うんだけど、でも、やっぱり、あそこ（保育所）もさ、有る意味、子どもたちだけの世界も大事なんだけど、「1日ずつ」とそう（子どもたちだけ）なんだよね。だから、「多世代」ではないんだよね。（略）乳幼児に関しては、やっぱり、ここで、（実践Dで）培われた。だから、堺さんだったり、堤さんだったり、子育てをしているお母さん方だったり。（略）ま、保育園はさ、0から6がいて、E幼稚園が、今だいぶ、増えたけどね。『縦割り』ていうのがだいぶ増えたけど、最初に、E幼稚園が縦割り（保育）を始めたのが、「そもそも、同じ年齢の人だけで、構成されている社会なんてありえないよね」ていう。（略）だから、「もともと、人間は多様な人たちの社会を構成して、生きていくわけ」だから、どんなにそれが、幼い子であっても、そういう経験を、この教育の場で、経験させなくてどうする？と。（略）なんかさ、「社会人ってこういうふうには、仕事を持っているひとは、こういうふうには、生きなきゃいけない！」ていうふうには、なんかあるじゃない？（社会規範のようなもの）。時間どおりに、出勤をして、一生懸命任された仕事を、（こなす）。いや、もちろんそうなんだよ。もちろん、そうなんだけど、「弱るとき」があって、「出来ないときが来るよな〜」とか「あるよな〜」とか。それは、病気に限らず、例えば、リストラだったりとか、いろんなことが重なって、「出来なくなる時がある」。で、「出来なくなる」のは、「自分だけじゃなくって」、いろんな人にそれは、いろんな事情で起きてくる。だけど、あの、それは、「そこで自分だけが何とかしなくちゃいけない」って、「自分だけの力で、なんとかしなくちゃいけない！」って思わなくていい。って。思った。実践Dではね。だから、お母さんたちも、「自分だけでなんとかしなくちゃ！」って思わなくていい場所になって欲しかった。

（4）堺さんの語り

保育者っていうのは、子どもを中心に考えるから、その子どもの何か、発達を阻害しているものは何だろう？って原因を考えた時に、やっぱりそういう対象として、親を見る場合が多い。だから、停滞している子とか、ちょっと、汚れが多くて、その子が何かしら、ストレスを抱えているっ

ていうような状況の時に、何がストレスになっているのかっていうものの対象の一つとして、親を考えるから、やっぱり、(略) 親御さんに「こういう部分を変えて下さい」とか、「こういう部分に協力して下さい」とか、わりと「保育者から要求をすること」になるのかな。そういうことになると思うんだよね。でも、実践Dはそれじゃない。保育者とは違って、親に対する理解も深める。親に対するものの見方、親に対する見方は、多分、私は、「変えている」と思う。(つまり) 私は、ここでは「保育士ではないんだ」っていうところは、自覚して、その「保育士面(づら)をしないようにしよう」とは、努力はしている。(親に対して) 要求しないし、「こういうもんだ！」っていうものを振りかざさない。(略) 保育士は、やっぱり、「こういう保育理論」に基づいてやっているから、「こうしなさい」とか「こうすべきだ」っていうものを、わりと、振りかざしてしまうけれども、そういう立場ではないっていうことは自覚している。(略) 何か、こう「そびえない」っていうか、「人に対してそびえないようにしよう」、っていうのは、私はすごく、気をつけようと思っている。(略) あと、保育園だったら、その子の発達の段階をみて、「ここに今、こういう刺激が必要だ！」とか、「こういう負荷が必要だ！」ってなった場合には、「与える」役割だよ。そういう役割が保育士にはあるよね。でも、実践Dでは、そういう必要性はないわけだよ。まあ、例えば、ちょっと、友達と遊ぶのが苦手とか、コミュニケーションが苦手っていうときに、手助けはするけれども。だから、「子どもの成長を促すためにやっているわけではない」と私は思っているのね。(実践Dでは) 本当に、「何かをしようとしているわけでもない」んだよね。その子と、その周りの環境が、「もっと生きやすくなるように」。(その子が、その子の周りの環境のなかで、)「もっと生きやすくなればいいなあ」と思っている。例えば、その子を、その発達に基づいて適切な対応はしているけれども、たとえば、おもちゃのとりあいとかした時にね、「おともだちに貸してあげましょう」なんて、絶対に無理だし。「貸して～」っていったら「いいよ～」なんて言うわけでもないし。だから、その子に、こう、「押し付けないように」したいな～と思って。「健やかにその発達を、進んでくれたらいいな」と思っている。(略) 実践

Dでは、そういうことを頑張っている子どもたちや親たちの気持ちの受け皿になる。(略) 実践Dは、お母さんに、「こうしたらいいよ」とか「ああしたらいいよ」とかじゃなくって、何を大事にするかっていうと、「共感」。いろんな「共感」とかね、他の人も同じように、悩んでいるんだね～とかね。でも、その人たちは、先輩たちは、こんな工夫をしていたよ。っていうような、私たちは、「橋渡し役」だから。私が、(親たちを) 指導しようと思えば、それは「指導」することはできると思うの。でも、そうじゃなくって、「誰々ちゃんちのトイレトレーニングはこういうふうにしたんだって～」とか、「この人のおうちは、こんなふうにしたんだって～。正解はないんだね～」みたいな。そんな感じのところの、私たちスタッフは、人と人、情報と情報の「橋渡し役」だから。それでいて、その、今のお母さんたちの苦しさだったり、嬉しさだったりすることに「共感」するっていうことが、私たちの役割だと思っているので。保育士をやっている時に、何が足りなかったのかなって思ったのは、やっぱり、「共感する力」が、その頃は、まだ、足りなかったんだって。その頃は、もう、子どものことで、いっぱいだったけど、それは、「共感する」っていうのは、子どもに対してもそうだし、親に対してもそうだったと思う。やっぱり、どうしても、頭に「理想の保育」っていうのがあるから、そっちのほうが大きかったから、子ども自身の、その、リアルな等身大の姿に「共感する」っていうのは、ちょっとその頃は、まだ、少なかったのかもしれないし。ましてや親に対しては、共感っていうのはね。全く(なかった)。

(5) 小括

実践Dへの参加のタイミングの観点から見れば、スタッフが実践Dに関与した後に、親の参加が始まる。このことから、「実践Dにおける子ども理解・親理解」のベースは、スタッフの子ども理解・親理解に依拠しているものとして理解可能である。今回の事例に照らせば、湊さん、堺さんの「子ども理解・親理解」が、「実践Dにおける子ども理解・親理解」のベースになっているといえる。湊さんは、小学校教諭からE幼稚園教諭を経験して実践Dのスタッフとなり、堺さんは保育士を経験したのち、実践Dのスタッフとなっ

たが、両者とも、前職での「子ども理解・親理解」については、自分自身の「子ども理解・親理解」あり方そのものを、批判的に省察していたことが、語りのなかに見られた。専門職といえども、最初から完成された「子ども理解・親理解」があるのではなく、湊さんの場合であれば「子どもや親から」「教えられ」、堺さんの場合であれば、「共感の視点」を持つことができたのは、実践Dのスタッフになってからだった。スタッフの「子ども理解・親理解」そのものが更新されていく実践Dに、親が参加することにより、親の「子ども理解・親理解」も更新されていく。親も「こうあれねばならない」という既存の規範意識そのものを相対化し、「実践Dにおける子育ての規範意識」をスタッフとともに創造していく役割を担っていると考えられる。実践Dでは、親もスタッフも何らかの悩みや抱え、葛藤しつつ、活動に参加していることが調査の結果から明らかになった。これは、自分自身もつ「規範意識」の「ゆらぎ」として理解可能である。「規範意識のゆらぎ」は、個人にとっては、自身が信奉する「価値観」が揺さぶられることでもあるため、自己のアイデンティティのレベルでの「危機」でもあるが、しかし、一方でそれは多様な価値観の受容への回路を開く側面も併せ持つ。

こうした「ゆらぎ」に対しては、「自分だけが悩んでいる」のではなく、「みんな、大変なのは一緒じゃないか」「それはそれで悩みはあるんだな」(岸さん)という新たな気づきへとつながる。すなわち「ゆらいでいるのは自分だけ」ではなく、実践Dに参加する親も、そしてスタッフも、同様であるということ認識することにより、「ゆらぐこと」そのものに新たな意味づけがなされていくと考えられる。既存の規範意識を相対化し、新たな規範意識を創造していくことは、親のみでも、スタッフのみでも不可能で、親とスタッフの双方の力が必要となる。子育ての協同実践の意味は、子育てにおける既存の規範意識の相対化と、新たな規範意識の創造にあると考える。

6. 結論と今後の課題

まず、第一に、スタッフの「子どもとの出会い」がある。「いろいろな子どもがいる」というスタッフの理解である。スタッフの「子どもの多様性理解」といえる。第二に、親は「いろいろな子ども

がいる」ということを、実践Dへの参加を通じて理解する。また、子どもを複数育てることで親の「その子理解」も深まる。親の「子どもの多様性理解」といえる。第三に、スタッフの「親との出会い」がある。スタッフは自己の規範意識を、親との出会いによって相対化し、自身の「親理解」の限界を意識化していくプロセスがあるといえる。第四に、親の「他の親との出会い」がある。子育てを行うなかでの悩みを共有することで、自己の子育ての規範意識を相対化し、「出来ない自己」を「赦す」ことにより、「出来ない他者」へのまなざしそのものをも変容させていく。「出来ない自己」や「自己の有限性」の認識を深めることが他者との連帯を要請する。他者との連帯による子育ての協同的な活動のなかでこそ、子どもの人間性を尊重する子育てが可能となるのではないかと考える。

今回調査できなかったスタッフ及び親への調査を続行し、実践Dでの「子ども理解・親理解」の深まりの過程を更に精緻化してことが今後の課題である。

引用文献・参考文献

- 全国保育団体連絡会・保育研究所(2018)『保育白書 2018 年度版』ひとなる書房
 渡辺頭一郎・橋本真紀編著(2018)『詳解 地域子育て支援拠点ガイドラインの手引き(第3版)』中央法規
 厚生労働省 HP「保育所等関連状況取りまとめ(平成30年4月1日)」<https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000350592.pdf>(最終閲覧日:2018/10/5)
 高嶋景子・砂上史子・森上史朗『子ども理解と援助』(2011)ミネルヴァ書房
 教育科学研究会編(2013)『子どもの生活世界と子ども理解』かもがわ出版

謝辞

本研究は JSPS 科研費 18K18615 の助成を受けたものである。